

障害者支援に限らず、就労支援のノウハウは、この国のあちこちに既に存在している。にもかかわらず、従来の縦割り行政が形成してきた就労支援の仕組みは、何らかの負因を持った者、平たく言えば、より困難な者を対象としているため、「普通の」若者はその守備範囲の外にある。その結果、普通の若者に対する支援は、民間の機関が行政の隙間を埋める形で細々と供給してきた。しかし、本報告書の他の章が明らかにしているように、無業者の問題は、既に、個々の民間機関では解決できないスケールに拡大している。

そこで、本章の基本的な提案は、これまで、各分野において蓄積されてきた就労支援のノウハウを共有化し、「普通の」若者が利用可能な形で提供しようというものである。この提案が支持されれば、初めて、就労支援は、これまでのセイフティネットにかからなかった、マジョリティ（その他おおぜい）を対象とすることができる。

なお、ここでの前提は、困難度の高い対象者に対して用いられているノウハウは、それを緩めに用いることにより、困難度の低い対象者にも活用可能だというものである。ただし、困難度の異なる対象者によって、困難度のベクトルが異なれば、支援の方向性が異なるはずだから、この前提は成り立たない。困難度のベクトルが、対象者によって異なるかどうかは、実証的な検討の対象である。この点については後で吟味することにする。

本章を書くに当たって、まず、筆者は15か所の就労支援機関を訪ねて聞き取りを行った。

支援機関の担当者から2時間あまり、話を聞くという作業だった。忙しい中、私に時間を割いてくださった担当者には、本当に頭が下がる。さらに、私は、内閣府を通じて、23の就労支援機関に対して郵送で調査票を送って回答を入手した。23の大まかな内訳だが、学生を対象とした機関、公募型の就労支援機関、犯罪・非行を犯した人の支援機関、障害者支援機関、発達障害者等の支援機関である。

第2節 困難度とは何か。

なぜ、仕事に就けない、続かない人がいるのか。彼らはどこが違うのか。無業者について何らかの変数を測定し、無業者についての値が（横断的研究において）有職者についての値と有意に異なったところで、この変数が、就労を基準変数とした予測妥当性や、まして、就労を結果変数とした因果性を持っているとは限らない。であるのに、どこが違うかという問いには、「とりあえず」、横断的観察に基づいた答えがしばしば持ち出される。たとえば、仕事が続かない理由として、しばしば持ち出されるのが、「対人関係が苦手」という表現である。あるいは、コミュニケーション能力の低さといったり、対人スキルの不足といわれたりすることもある（例えば、山田、2004；本田、2005）。

しかし、対人関係が苦手とは、「引っ込み思案」なのか、「集団におけるストレス耐性が低い」のか、「プライドが高すぎる」のか、「空気が読めずに余計な一言を言って集団から浮いてしまう」のか、「他人が自分をどう思っているかが気になってしまう」のか、さらに、こうしたことの一部なのか、それとも全部なのかは分からない。あるいは、対人関係が苦手といわれる背後に、「要領が悪い」、「いつべんに二つのことができない」、「ミスをして修正できない」といった、仕事能力そのものについての困難がある場合もあるだろうが、この場合であっても、「今日も、怒られるから行きたくない」、「先輩に迷惑を

かけたくない」といった対人関係の問題として表現されることも考えられる。

これらの問題点が、同じことの異なる表現なのか、あるいは、そうではなく、そもそも異なることなのか、つまり、類似した、複数の（あるいはことによると単数の）構成概念がどのような次元関係にあるのかは、定量的な検討の対象である。今回の郵送調査からは、ささやかながら、この点に関する検討を試みることができる。というのは、支援機関に対し、対象者が、特定の問題を持っているかを5件法（1 全員 2 半数以上 3 半数 4 半数以下 5 いない）で尋ねたからである。

- ・ 集団の空気が読めず、浮いた言動を取る
- ・ 人と話をするのが苦手
- ・ 打たれ弱い
- ・ プライドが高い
- ・ 他人が自分をどう思っているか気になる
- ・ 一方的に自分が話したいことを話す
- ・ 要領が悪い
- ・ こだわりが強い

の8つである。この8つの項目を選んだ背景には、筆者が静岡で行っている就労支援活動（津富，2004）を通じて得た印象や、就労支援を行っている他の機関の人々との会話があるが、確たる理由はない。本来は、こうした就労支援活動を行っている人々が集まって、ああでもない、こうでもない議論をして、項目を選択すべきところである。

これらの8項目がお互いにどの程度の関係があるかは、相関係数を取ることで判断できる。その結果は、表4-1-1にあるが、1つのペアを除いて、すべての相関係数が5%水準で（そしてほとんどの場合1%水準で）有意であり、その相関係数の大きさも、3つのペアを除き、0.5以上と非常に大きく、平均は四捨五入で0.62に達する。すなわち、この8項目は、お互いに関連が強い。² このように、就労支援の困難度が次元であるように思われることは、私の基本的主張の背後にある前提（困難度の高い対象者に対して用いられているノウハウはそれを緩めに用いることにより困難度の低い対象者に活用可能だ）についてはそれなりの信憑性が得られたということであろう。

²標本数が23とあまりにも小さいので、因子分析を行うのは好ましくないが、一応、行くと、第一因子だけで分散の67%が説明された。

表4-1-1 支援対象者の持つ問題についての評価の相関

N=23	集団の空気が読めず、浮いた言動を取る	人と話をするのが苦手	打たれ弱い	プライドが高い	他人が自分をどう思っているか気になる	一方的に自分が話したいことを話す	要領が悪い
人と話をするのが苦手	0.676 0.000						
打たれ弱い	0.568 0.005	0.631 0.001					
プライドが高い	0.650 0.001	0.516 0.012	0.771 0.000				
他人が自分をどう思っているか気になる	0.552 0.006	0.700 0.000	0.805 0.000	0.656 0.001			
一方的に自分が話したいことを話す	0.720 0.000	0.555 0.006	0.445 0.033	0.559 0.006	0.530 0.009		
要領が悪い	0.511 0.013	0.689 0.000	0.691 0.000	0.467 0.025	0.548 0.007	0.333 0.120	
こだわりが強い	0.776 0.000	0.755 0.000	0.705 0.000	0.613 0.002	0.619 0.002	0.552 0.006	0.760 0.000

上段	Pearson の相関係数 有意確率 (両側)
下段	

第3節 より困難な対象者とは

今回の郵送調査では、同一のタイプの機関については、1か所のみを調査対象とした。たとえば、少年の更生保護施設については、一か所だけを調査対象とした。だから、特定のタイプの機関ごとの標本数が小さすぎるので、特定のタイプの機関について「このタイプの機関は」という一般化した言明はできないし、すべきでもない。というのは、そのタイプの機関についての安定した平均値を求めるのに必要な標本数がないからである。とはいえ、23もの回答があると、何らかの傾向を読みとることは可能である。先ほどの8項目のそれぞれの項目について値を標準化し、23の機関について平均値を取り、平均値の大きい順にランク付けした。対象者が特定の問題を持っているかどうかを(1 全員 2 半数以上 3 半数 4 半数以下 5 いない)という反応カテゴリーで尋ねているので、ランクの高い支援機関ほど、困難度が低いということになる。

すると、表4-1-2に見るように、最も困難度が低い(1位)のが学生を対象とした機関であり、最も高い(23位)のが犯罪、非行を犯した人の支援機関となる。表4-1-2からは、目指す職業形態が読み取れるが、それを見ても、ランクはそれなりの妥当性を持っているようである(とはいえ、信頼性は低い)。

例えば、公募型のプログラムを持っている支援機関のランクは、2, 6, 7, 14, 15位。これらの機関は、いわゆる「フリーター」を対象とするものから実質的には「社会的引きこもり」を対象とするところまで多岐にわたっていることから、そのような結果となったようだ。一方、障害者の就労支援機関のランクは、5, 8, 9, 12, 16位と中位に固まっている一方、発達障害者の支援に当たっている機関のランクは、17, 19, 21, 22位と低いところに固まっている。今回の調査に伴って行った聞き取りでも、発達障害は、問題性が見えにくく、能力が高い分、かえって、職場適応が難しいと何度か聞いたが、その点を反映しているのだろうか。

また、非行・犯罪関係の支援機関のランクは、3, 4, 10, 13, 23位とばらついている。これらの